



「女性リーダー育成型」特集 番外編



矢野 理香

北海道大学
副理事
ダイバーシティ・
インクルージョン
推進本部 副本部長

山口 淳二

北海道大学
理事／副学長
ダイバーシティ・
インクルージョン
推進本部 本部長

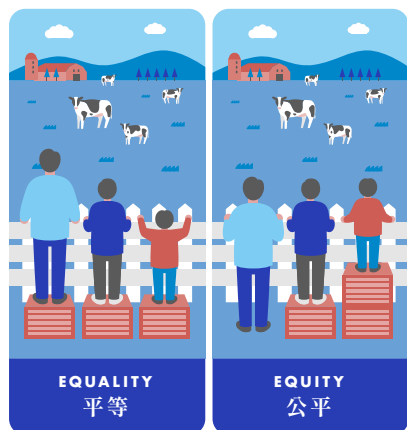
北海道大学(以下、北大)のダイバーシティ推進を中心となって牽引してきたダイバーシティ・インクルージョン推進本部(Office of Diversity, Equity and Inclusion: 以下、DEI推進本部)本部長の山口淳二理事と副本部長の矢野理香副理事。

News Letter 6号では「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ(女性リーダー育成型)」の申請に至るまでの経緯や、今回の採択にあたっての意気込みをお二人に対談形式で伺いました。こちらでは本紙に収まりきらなかった対談の続きを、DEI推進本部の「E」の部分であるEquity: 公平性についてのお話を中心にお届けします。

— 様々な支援のあり方についてお話いただきましたが、一律に同じ支援を行うのではなく、一人一人の当事者に寄り添う形での支援を進めていくことが大事なのですね。これはDEI推進本部の名前にもあるEquityの考えに通じるのでしょうか。

山口理事 ニュースレターに公平性の図*がありますが、とてもわかりやすいですよ。背の違う人たちに同じ踏み台を配ると、結局それぞれの見るところの位置が違ってしまいますので、目線を合わせるために踏み台をそれぞれにあった高さに調整するという考え方ですね。それぞれの立場を配慮する、合理的配慮という考えに基づいたものですが、非常に重要だと考えています。

矢野先生 この図を見てもらうと、より自分ごととして捉えてもらいやすくなりますよね。例えば、子育てをしている女性に対して、「子育てとの両立はきっと大変だろうから、この仕事はできないだろう」と、周囲が配慮することもあると思います。しかし本人は実はその仕事をやりたいと思っていて、別の配慮のあり方を望んでいるかもしれません。でも良かれと思ってされた配慮を無下にはできないというジレンマもでてきてしまいます。このようなギャップを解消するためにも個別の事情に寄り添えるような支援を目指して、DEI推進本部では様々な立場の方にヒアリングをきめ細かく行っています。



山口理事 DEI推進本部という目に見える形の組織ができたことによって、色々な声が集まりやすくなってきているのを実感しています。なかなか簡単に解決できる話でなかったとしても、意見を言える場所が出てきたというのはやはり大きな意義があると思います。

— DEI推進本部では座談会や交流会などざっくばらんに意見交換できる場を設けていますね。今までどこに向けたいかわからず飲み込んできた言葉を、受け止めてくれる環境ができたことは大きな前進ですよ。

矢野先生 そうですね。本当にそう思います。実は大きな変更をしなくても、例えば、会議の時間を少し早めに設定する、といった小さな変更で解決できるようなこともあります。何に困っているのか尋ねてもらえれば答えられるけれど、自ら声をあげるのは憚られる、という当事者の気持ちもとてもわかります。

*DEI NEWS LETTER Vol.01 掲載

山口理事 キャリアを継続する上でどういった支援が適切なのかは個々の事情で異なります。ですから事例をたくさん集めたり発信したりすることも大事だと考え、ロールモデル発信などに力を入れてきました。

矢野先生 具体的な事例を知ると、このような場合は「はっきり言えばよかったんだな」って気づきますよね。私もそうでしたが「こういう配慮があると、とてもありがたいんです」と言うのを飲み込んでいた方も多くいらっしゃいます。でも事例を知って自分でも実際に口に出してみると案外スッと受け入れられて。「もっと早く話していればよかった」という声も多く聞きます。

—本人から周囲の人に伝えにくい場合のコミュニケーションにDEI推進本部のようなところが加わってくると、解決のきっかけになりますね。

矢野先生 そのような事例の一つとして、障害のある方のお話で、いつも一番上の棚にあるものが自分では取れないので誰かに取ってもらっていたそうなのですが、その方曰く「中段であれば自分で取れるんですよ」と。その置き場所を中段に変えてもらえたら、毎回頼まずに済むので気を遣うこともなくて良いのに…と思われていたそうなのですが、なかなかそれを言い出せなかったそうです。結局、ものの置き場所を中段に変更してもらうことで解決できたのですが、とても公平なやり方ですよ。本人も楽し、周りも置き場所が変わるだけで不都合はないし、たったそれだけのことですが、そういったことがもしかしたら身近にいろいろあるかもしれません。



山口理事 自分たちの状況に合った形で、多種多様で幅広い人材が共存し、活躍できるダイバーシティ環境をしっかりと作り上げていきたいと考えています。ダイバーシティ環境を作り上げる方法の一つではありませんよね。自分たちの状況に合ったダイバーシティ環境をどのように作り上げていくのかを自分たちで考えた方がより良いものができると思っています。そのために、我々は上から押し付けるのではなく、それぞれがしっかりと進めていくのを支援させてもらうというのが推進本部としての立場だと思っています。

Interview こぼれ ばなし

—インタビューの中で、ロールモデルとなる女性教員が毎日生き生きと過ごしているという姿を見せてくれることも重要だというお話（ニュースレター掲載）がありましたが、先生方が毎日生き生きと過ごすためにやっている習慣やアイデアなどはありますか？

山口理事 北大は自然環境が素晴らしいので何かに行き詰まったら、とりあえず外を歩いてみるということをおすすめします。自分のお気に入りの道を見つけたり、気分転換にふらっと歩いてみるのが北大のキャンパスのいいところなので、ぜひ活用していただきたいです。

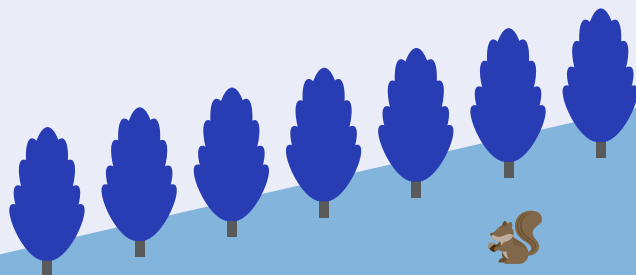
矢野先生 山口理事にもお気に入りの道があるのですか？

山口理事 私にもありますよ。理学部にいたときはポプラ並木の方を歩いていると動物を見かけたりして、いい気分転換になっていました。

矢野先生 四季折々の変化が見られたり、地域の人が庭のようにキャンパスを使っているのがいいですよ。保育園の子たちがお散歩しているのもよく目にするので、なかなかそういったキャンパスってほかにはないですよ。

山口理事 卒業生もみんな北大に愛情を持っていて、このキャンパスで過ごせたことが愛着につながっているのだと思います。

—本日は貴重なお話をどうもありがとうございました。



いかがでしたでしょうか？

山口理事と矢野先生のパーソナリティーが垣間見える貴重なエピソードもお聞きすることができました。

まだ、ニュースレターをご覧になっていない方はインタビューの本文もご覧ください。

NEWS LETTER vol.6を読む▶

